

2008/10/27 (mon)

S.C.WORKS 今週のスタディ！

【ヘッドライン】

- 1) 「競合スーパー、“食育”テーマに合同勉強会」
- 2) 「増えるハイテク農業」
- 3) 「死蔵食品 増加の兆し」
- 4) 「生態系守るエコロード」

---

1) 「競合スーパー、“食育”テーマに合同勉強会」

相鉄ローゼンなど神奈川県内のスーパー3社は18日、各社幹部などを対象に「食育」をテーマとする合同勉強会を行った。競合各社が同じテーマで合同勉強会を行うのは、スーパー業界では初めての試みという。

相鉄ローゼン、コープかながわ、富士シティオ3社の社長と企画経営部門、商品仕入れ部門などの部課長クラス約90人が出席した。

富士シティオの菊池淳司社長は冒頭、「現場に戻れば互いに競合関係になると思うが、今日の勉強会の成果を共に生かしていきたい」とあいさつした。

勉強会には、千葉県内を中心に36店舗を展開するワイズマートの吉野文雄取締役営業本部長が講師として招かれた。吉野さんは、同社の「食育」をテーマとした売り場づくりなどを解説。季節野菜を使ったメニューを買い物客に提案・試食してもらうことなどで、食材がより売れることなどを紹介した。

何かにつけて不安感が否めない近頃の世の中の状況を見ていると、横のつながりの大切さを感じる。

他人（他社）の目を取り入れることで知識・情報の幅が広がり、不正に対してももっと厳しい目を向けられると思う。

ただ、最初は新鮮味があっても回を重ねるとマンネリ化して本来の目的が薄れる恐れがあるので、その点は注意が必要ではないか。

---

2) 「増えるハイテク農業」

農家の高齢化、安い海外産食品との競合、飼料や肥料などの原材料高と、農業を取り巻く環境の厳しさが増す中、国内の農家がハイテクを取り込み、効率化を図る動きが顕著である。

京都では、野菜卸売り会社が野菜栽培会社を立ち上げ、4月に京都府亀岡市の野菜工場で作った「ベジタス」というブランドのレタス3種類の販売を始めた。

京阪神の大丸の野菜売場のほか、ホテルのレストランなどに出荷している。卸の業界には、近年スーパーや百貨店が直接産地と取引を増やしていることから危機感があると、工場栽培を始めた。

3段の栽培棚14列を設け、工場敷地の3倍以上の栽培面積を確保した。夜間限定で蛍光灯を使用し、電気代を節約する等して、小売価格は露地物の1.2から1.3倍に抑えている。

北海道の牧場では、牛舎の天井からぶら下がる巨大な金属製の自動給餌機で給餌をしている。新鮮な牧草を少量ずつ与えるよう支持ができ、牛の体調に合わせて量や回数も変えられる。人件費の節約になる上、人手のかかる給餌の時間が大幅に短縮される。

ハイテクを導入すれば、天候不順や害虫の影響を受けず品質や出荷数も安定したり、効率化による経費節約ができる。環境に大きく左右される高リスクな従来の農業界に、これから徐々に光が差しそうだ。

---

### **3) 「死蔵食品 増加の兆し」**

死蔵食品とは、使うために買ったのに冷蔵庫の中で駄目になってしまっている食品のことだ。物価高を乗り切ろうとまとめ買いをしても、ちゃんと在庫管理をしないと混雑する冷蔵庫で埋もれてしまいがちだ。食の不安による過剰な「鮮度志向」も死蔵食品を増やす一因になっている。

あるアンケートでは食品を死蔵させることがあるという回答は7割あり、理由としては「冷蔵庫の奥にしまい忘れてしまう」という答えが多かった。要冷蔵の食品、非食品も商品に増え、なんでも詰め込み冷蔵庫が迷宮化しているようだ。最近では500リットル以上の大型冷蔵庫が人気で、余計に食品が奥に入って迷子になっている。

もう一つの理由は、消費者の「鮮度志向」が少し過剰であることが挙げられる。度重なる食の不安から、ちょっと古くなっただけで食品に見切りをつけてしまう人が多い。賞味期限などの表示の気にし過ぎが、結果食品廃棄につながっていると見られる。

「もったいない」という節約意識が強まる一方で、折からの食の不安で食品の表示や鮮度に過敏になる消費者たちは、安いからといって必要以上に食品を購入しない習慣や使い切るコツを身に付けなければ、その安全志向や節約志向は本末転倒し続けてしまうだろう。

---

### **4) 「生態系守るエコロード」**

自然環境の保全に対する社会的関心が高い今日、農村地域での道路建設は、自然に及ぼす影響を最小限にとどめ、生態系に配慮することが求められている。このため、道路周辺の自然環境を保全する道づくり「エコロード」が実施されている。

エコロードの一つに、道路に侵入した動物が、走行する自動車にはねられ死亡する「ロードキル」の防止策がある。

全国高速道路でのロードキルは年間3万件に上る。ロードキルの発生時期や時間帯は、一つには道路の交通量、走行速度、走行時期（時間帯、曜日、季節）、二つにはその地域に生息している動物の種類と生息数、各動物の行動圏（休息場、餌場、水場、繁殖の場など）における年間の行動サイクルに左右される。

防止策としては、移動経路を確保するための橋りょう、カルバート（中・小型ほ乳類や両生類・爬虫類の移動のための地下通路）、オーバブリッジ（サル、タヌキ、キツネ、シカなどの移動）、路肩への高木植栽（飛行高度の低い鳥類）、道路への侵入防止柵など。農村地域のロードキル対策は中山間地において実践されるようになり、施設の機能が低下しないように、施工後の維持管理対策にも十分留意する必要がある。